

新イヌワシ・ムササビ・ツル舎整備

令和6年(2024年)2月22日

1 イヌワシ・ムササビ・ツル舎整備の概要

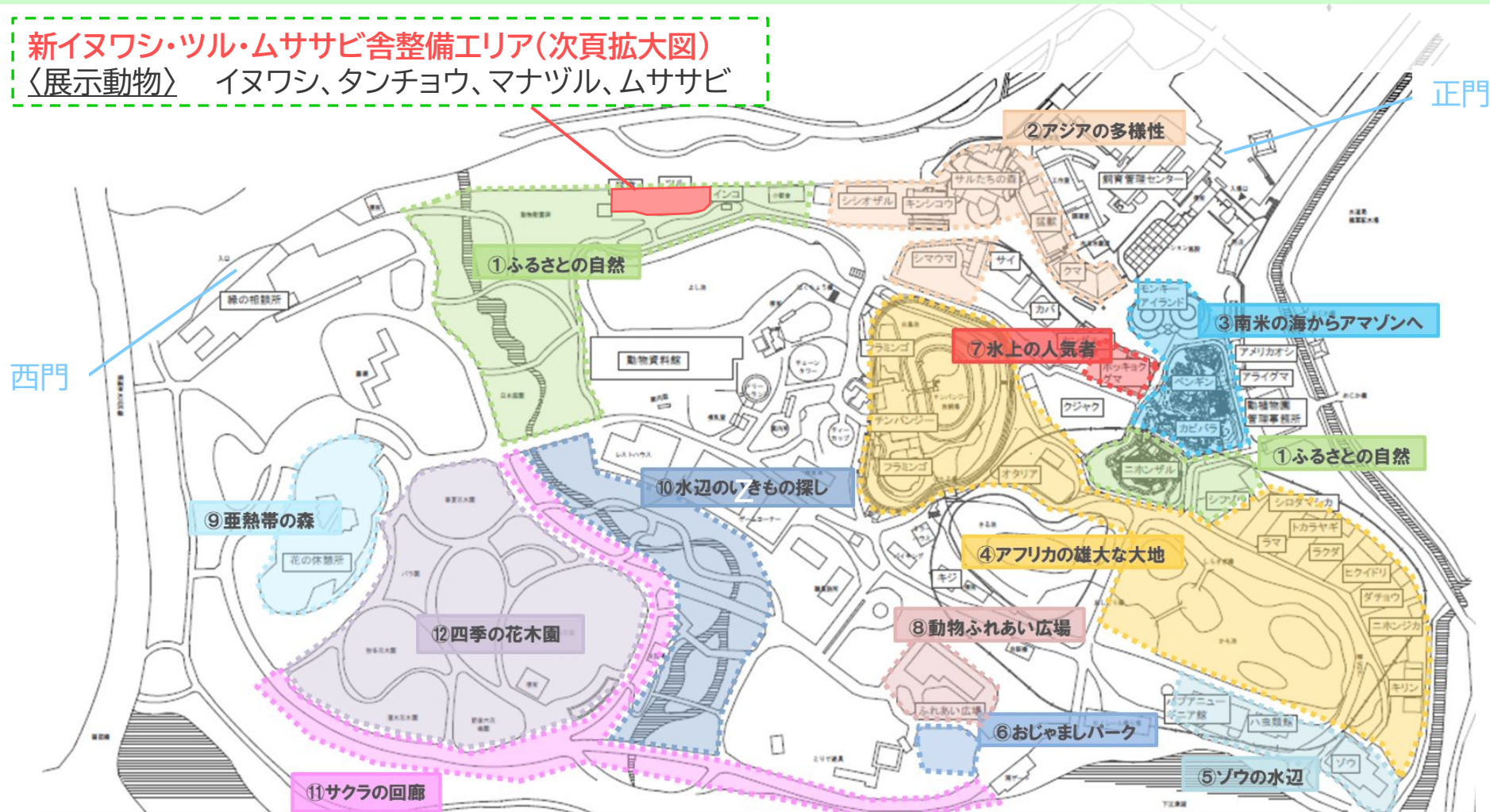
熊本市動植物園マスタープランにおける「**ふるさとの自然エリア**」の一つの施設として整備

〈エリア展示テーマ〉熊本県及び国内の動物を通じ、身近な自然の大切さと生物多様性を学ぶことができる展示

わたしたちに身近な動物たちを、ふるさとの原風景を実感できるような環境で動物福祉にも配慮した展示を行うことで、その生態や生息環境を知り、身近な自然の大切さや生物多様性、その種の保存の必要性について学び、伝えていくエリア

新イヌワシ・ツル・ムササビ舎整備エリア(次頁拡大図)

〈展示動物〉 イヌワシ、タンチョウ、マナヅル、ムササビ



1 イヌワシ・ムササビ・ツル舎整備の概要

〈整備面積〉約 338㎡ (延床面積 : 122㎡)

※ イヌワシ舎 約147㎡(既存 約55㎡ + 新設 約92㎡)、ツル舎 約123㎡、ムササビ舎 約21㎡

〈整備費〉 設計費 約 4,610千円 工事費 約 207,900千円

- 展示風景に溶け込むように自然な土の色合いをイメージして施設の色味は黄土色～茶色、金網は黒色
- ふるさと自然エリアのテーマカラーの緑色を看板等を使用

〔イヌワシ舎〕

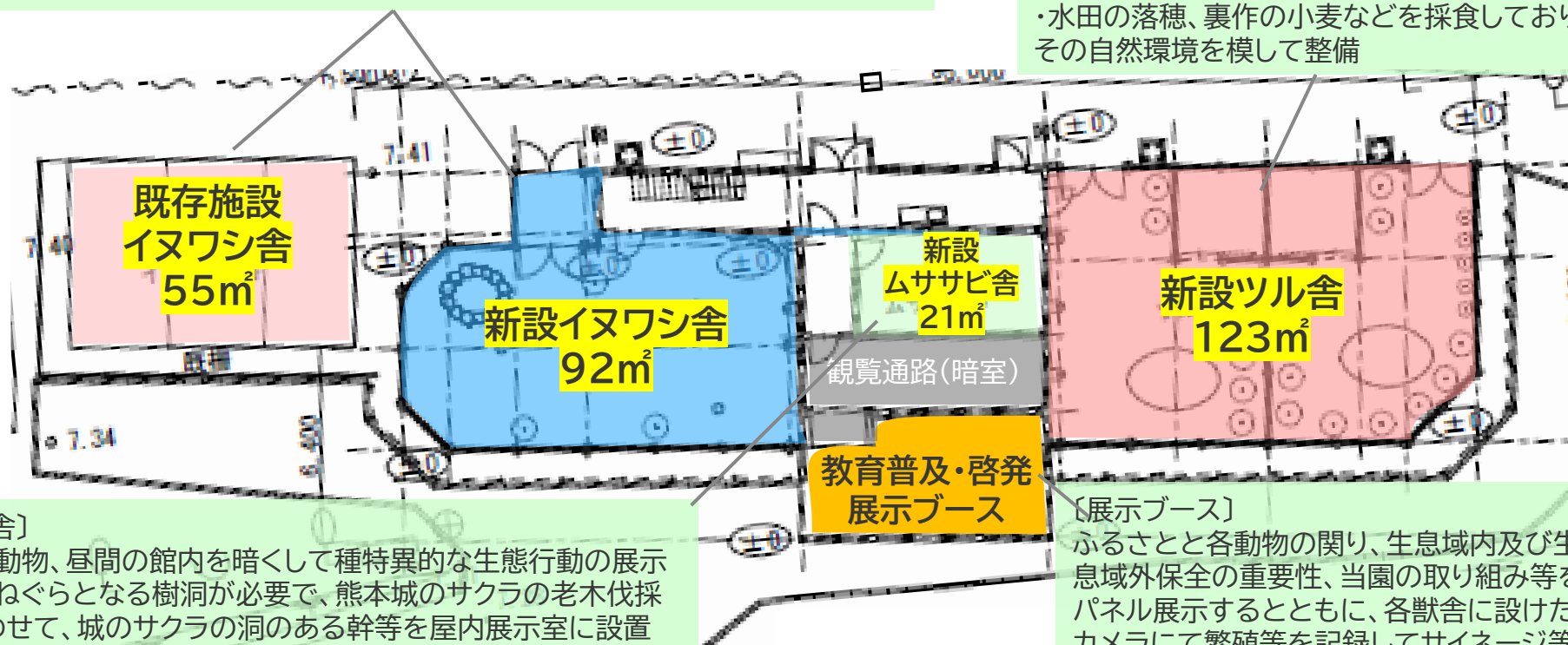
- ・自然界での繁殖場所等の生息環境を模して岩壁・岩穴による巣台と松の擬木を作成
- ・既存施設も含んだ施設面積は100㎡以上、新獣舎は高さ6mで巣台の高さは4m。
- ・オオワシの適正施設ガイドラインも参考に整備

〔タンチョウ舎〕

ヨシやスゲ類の生えた湿地である自然界での繁殖場所を模して整備

〔マナヅル舎〕

・水田の落穂、裏作の小麦などを採食しており、その自然環境を模して整備



〔ムササビ舎〕

- ・夜行性の動物、昼間の館内を暗くして種特異的な生態行動の展示
- ・生息にはねぐらとなる樹洞が必要で、熊本城のサクラの老木伐採事業に合わせて、城のサクラの洞のある幹等を屋内展示室に設置

〔展示ブース〕

ふるさとと各動物の関り、生息域内及び生息域外保全の重要性、当園の取り組み等をパネル展示するとともに、各獣舎に設けたカメラにて繁殖等を記録してサイネージ等で伝えていく

1 イヌワシ・ムササビ・ツル舎整備の概要



2 各飼育動物と新施設の詳細

(1) イヌワシ

- 熊本市動植物園コレクションプラン上の分類 : **推進種**

- 国内外における種の位置付け

- ✓ ワシントン条約 : 付属書Ⅱ (保全のため取引規制を受ける)
- ✓ 環境省レッドリスト2020 : EN(絶滅危惧ⅠB類)
- ✓ (公社)日本動植物園水族館協会の繁殖計画 : 管理種(計画的に管理する最重要種)
- ✓ レッドデータブックくまもと2019 : 絶滅危惧ⅠA類(CR)
- ✓ 種保存法での国内希少動物に指定(+ 国の天然記念物)
 - **環境省の保護増殖事業(※)**対象種における鳥類16種のうちの1種
 - ※国内イヌワシ保護増殖事業の背景 ~生息環境での個体数減少と繁殖成功率の低迷~**
 - ≪原因≫ 大規模開発による生息地の消失、イヌワシの餌動物の生息環境の悪化



日本のイヌワシ個体数(推定)(※令和3年8月現在)

2004年 最大約650羽(環境省調査)
→ 2014年約500羽(日本イヌワシ研究会)

日本のイヌワシの繁殖成功率(※令和3年8月現在)

1980年代 平均47%
→ 2015年 平均11.4% 低迷傾向

国は、全国規模でのイヌワシ生息域内及び生息域外保護事業を展開

- ・ 1996年 イヌワシ保護増殖事業計画
- ・ 2015年 イヌワシ保護増殖事業マスタープラン(主:イヌワシ保護増殖検討会)
- ・ **2019年 将来的な野生復帰に備えたイヌワシ飼育下個体群の管理方針(生息域内保全を補完)**

(公社)日本動植物園水族館協会加盟園館も、飼育下での生息域外保護事業を展開(管理計画と現状)

- ・ 1975年飼育下繁殖初成功、1989年人口育雛初成功、2010年有精卵移動成功、2014年園館同士で雛移動・別ペアで育成成功
- ・ 全国動物園の繁殖実績 過去5年で7羽(2019年0羽、2020年0羽、2021年4羽、2022年1羽、2023年2羽)
- ・ 今後の目標は、種卵やヒナの移動を見越した生理生態の知見集積し、飼育繁殖技術を確認し、国の保護増殖事業へ積極的に関与

- **熊本市動植物園におけるニホンイヌワシの生息域外保全事業と飼育方針**

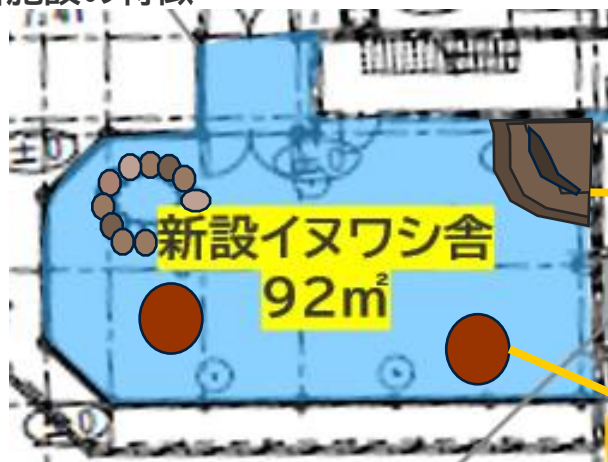
~九州唯一のイヌワシ飼育園館として、飼育・繁殖を通じて生物多様性保全における生息域外保全取組みの認知度を高める~

- ✓ 2018年度より保護増殖事業に参加、交付金にて既存施設をイヌワシ飼養に適した施設に改修、生息環境や域外保全取り組みパネル作成
- ✓ 2019年に雄1羽(2024.3で9歳)、2022年に雌1羽(2024.4で3歳)を導入、**より繁殖に適した新施設を現在建設中**
- ✓ 2024年1月現在、新施設のため移動した別展示場にて繁殖に向けたペアリング中
 - オスが巣材を運び、1月中旬以降には鳴きかわす様子を確認。今季繁殖シーズンに産卵・抱卵がなければ、新獣舎へ移動・繁殖を目指す

2 各飼育動物と新施設の詳細

(1) イヌワシ

● 新施設の特徴



※既存施設は、次の繁殖を促進するための巣立った成鳥の隔離施設として使用

- ✓ 高さ6mの屋根、既存施設より広い空間にて飛翔力を身につける
- ✓ 生息環境の繁殖場所である岩棚の巣台を模して、放飼場の一角に屋根近くまで届く擬岩でできた岩壁とその上方高さ4mには岩穴を作製
- ✓ 巣台近くには繁殖の様子を確認できるカメラの設置とバックヤードにモニターとレコーダー設置
- ✓ 巣台横のバックヤード壁には小窓を設けて巣内の管理を行う
- ✓ 生息環境下での止まり木としての松の幹枝を模した高さのある擬木は、擬木から擬木へ、巣台から擬木へと、野生復帰のための飛翔力を高める
- ✓ 止まり木の表面は凹凸をつけて趾瘤症対策
- ✓ 擬岩で囲まれた水浴び場

● 展示ブースでの啓発活動

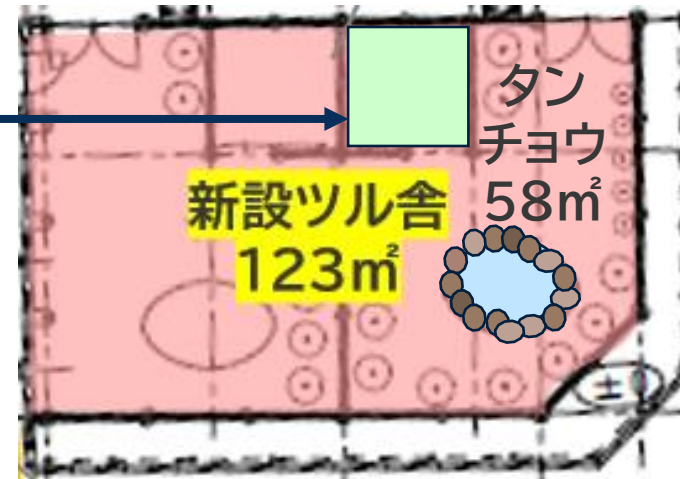
- ✓ 1995年までは阿蘇で目撃されていたが、現在はない。九州他県での観測も困難となっている。熊本県のイヌワシがいたと推測される名称等や園でもかつて県内で負傷したイヌワシを保護・飼養された事例を紹介し、個体数減少と域外保全の重要性について啓発するパネルを展示
- ✓ 獣舎にカメラを設置し、繁殖～育雛の様子等について記録し、屋内展示ブースでサイネージ等で紹介



2 各飼育動物と新施設の詳細

(2) タンチョウ

- 熊本市動植物園コレクションプラン上の分類：**推進種**
- 国内外における種の位置付け
 - ✓ 環境省レッドリスト2020：VU(絶滅危惧Ⅱ類)に指定
 - ✓ 種保存法で国内希少動物種に指定(＋国の天然記念物)
 - 保護増殖事業対象種における鳥類16種のうちの1種
 - ✓ (公社)日本動植物園水族館協会の繁殖計画:管理種(計画的に管理する最重要種)
 - ✓ ワシントン条約：付属書Ⅰ(保全のため取引規制を強く受ける)
- 飼育方針
 - ✓ 2013年に雌1羽(16歳)、2022年に雄1羽(20歳)を導入
 - ✓ 2024年1月現在、別展示場にて繁殖に向けたペアリング実施中
 - 互いによく鳴きかわし、巣材を集める様子がみられている
 - 繁殖シーズンに産卵・抱卵がなければ、今後は新獣舎へ移動して繁殖を目指す
- 新施設の特徴
 - ✓ ヨシやスゲ類の生えた湿地である自然界での繁殖場所を模して整備
 - ✓ 繁殖のためのお見合い用隔離パドック、また、繁殖時期の営巣・産卵・抱卵の場所としての入目による緊張を緩和するための**予備パドック**を設ける
 - ✓ 4.5mまでの高さを設けて動物福祉に配慮。
- 展示ブースでの啓発活動
 - ✓ 国内でみられるツルの中で、唯一国内の生息環境で繁殖まで行う種であるタンチョウの国の保護増殖事業とその成果などについて紹介
 - ✓ 獣舎にカメラを設置し、繁殖～育雛の様子等について記録し、屋内展示ブースでサイネージ等で紹介



2 各飼育動物と新施設の詳細

(3) マナヅル

● 熊本市動植物園コレクションプラン上の分類 : **推進種**

● 国内外における種の位置付け

- ✓ 環境省レッドリスト2020 : VU(絶滅危惧Ⅱ類)に指定
- ✓ 種の保存法で国際希少動物種に指定(+ 国の特別天然記念物)
- ✓ (公社)日本動植物園水族館協会の繁殖計画 : 管理種(計画的に管理する最重要種)
- ✓ レッドデータブックくまもと2019 : 準絶滅危惧(NT) 全国局限にある
- ✓ ワシントン条約 : 付属書Ⅰ(保全のため取引規制を強く受ける)

● 飼育方針

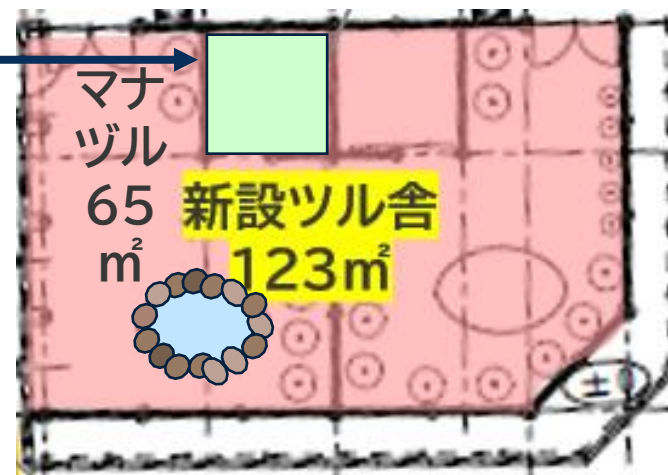
- ✓ 現在は負傷病にて保護された雄1羽を飼育しており、今後繁殖に向けて雌の導入を他園等と調整中

● 新施設の特徴

- ✓ 水田の落穂、裏作の小麦などを採食しており、その自然環境を模して整備
- ✓ 繁殖のためのお見合い用隔離パドック、また、繁殖時期の営巣・産卵・抱卵の場所として、人目による緊張を緩和するための**予備パドック**を設ける
- ✓ 4.5mまでの高さを設けて、動物福祉に配慮

● 展示ブースでの啓発活動

- ✓ マナヅルは西日本のとくに鹿児島県出水市を中心に越冬のため飛来する。大正時代から保護に力を入れてきた出水市だが、地元では農業被害に悩まされ、感染症が蔓延した場合は個体数の大幅な減少が懸念されている。出水市以外にも越冬地を分散させる取り組みが必要であり、ヒトとヅルとの共生、生物多様性の観点からも分散が重要。2024年に熊本県玉名市の干拓地域に飛来した情報も提供しながら、越冬地の課題も啓発していく
- ✓ 獣舎にカメラを設置し、繁殖～育雛の様子等について記録し、屋内展示ブースでサイネージ等で紹介



2 各飼育動物と新施設

(4) ムササビ（ホオジロムササビ）

- 熊本市動植物園コレクションプラン上の分類：維持・継続種
- 国内外における種の位置付け
 - ✓ 環境省カテゴリーに該当なし
 - ✓ JCP対象種外ではあるが、レッドデータブックくまもと2019：準絶滅危惧(NT)
 - ✓ 地域的孤立・希少
- 飼育方針
 - ✓ 鳥獣保護センターへ負傷等で運び込まれて保護されたが野生復帰できなかったムササビを、当園にて飼養管理
 - ✓ 現在は、雄2頭を別棟で単頭飼育中
 - ✓ 新獣舎での同居を予定



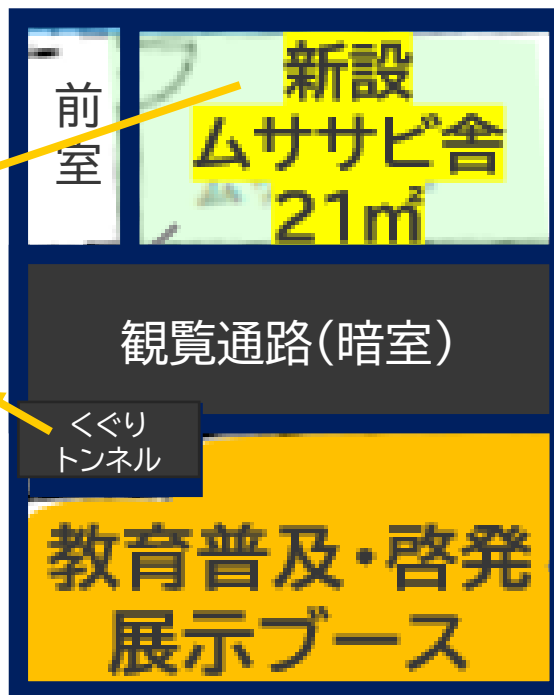
- 新施設の特徴
 - ✓ 夜行性の動物、昼間の館内を暗くして種特異的な生態行動の展示
 - ✓ 生息にはねぐらとなる樹洞が必要で、熊本城のサクラの老木伐採事業に合わせて、城のサクラの洞のある幹等を屋内展示室に設置予定

展示ブースの奥に新ムササビ舎



くぐりトンネルの入口

- 展示ブースでの啓発活動
 - ✓ ムササビはくまもとの里山を代表する哺乳類だが、現在は、生息地の分断で遺伝的な孤立が懸念されている。生息にはねぐらとなる樹洞が必要で、そのような木が育つ森林の広がり確保したり、みどりの回廊によって社寺林や屋敷林、里山の連続性を向上させたりすることが重要であることをパネル等で啓発
 - ✓ 1987～1988年には、熊本城でムササビの目撃情報があったが、現在は途絶えている。熊本城は市街地の中心部に位置するが、城のまわりには桜やヒノキの木などの大木が点々と残っており、熊本城に連なる京町台地や近隣の金峰山には、今現在もムササビが生息している。ムササビは大木の樹洞などに棲み、樹木の葉や芽、果実などを食べる。熊本城のサクラの老木伐採事業で出るムササビの生息環境に適する幹等を再利用し、それをパネル等で啓発



3 事業スケジュール

